

中華民国時代における南京市公館の外部空間の構成特徴に関する研究

A Study on the Spatial Composition and Characters of the Exterior Space in Mansions during the Period of the Republic of China in Nanjing

馬 嘉* 孔 明亮* 張 清海** 三谷 徹* 章 俊華*

Jia MA Mingliang KONG Qinghai ZHANG Toru MITANI Junhua ZHANG

Abstract: This paper aims to clarify the character of mansions built during the Period of the Republic of China in Nanjing, by focusing on spatial composition and the exterior space arrangement of the main building. Based on the historical background of the Republic of China, historical textual research and on-the-spot investigation were carried out into the spatial composition of the mansions, 17 mansions are selected as study objects. Analyzing the two-dimensional composition of sites and the three-dimensional composition of attachments for the main buildings shows the character. The result of this research indicated that, the two-dimensional composition such as the position of mansion on its site, and the three-dimensional composition such as the position or type of attachments, not only imitates European and American residence, but also utilizes characters of traditional Chinese residence. The main building's position and plane figure of the site on the exterior arrangement, which can be seen as a combination of Chinese style and Western style, has changed.

Keywords: Republic of China, mansion, exterior space, composition features

キーワード：民国，公館，外部空間，構成特徴

1. はじめに

1912年から1949年まで、中国大陸が中華民国に支配されていた時期は、中華民国時代と呼ばれる。中国が政治、経済、建築などの多方面で、急速に欧米文化を吸収した時期でもある。

阿片戦争後、租界の設立と共に、西洋様式の建築が大量建造されたが、欧米から留学してきた建築家たちは、中国と西洋文化を融合し、互いに補足する理想を抱いていた。それ故、1929年12月、国民政府は米国籍のHenry Killam MurphyとErnest Payson Goodrichを顧問に迎え、「欧米の科学的な原則に基づき、中国の美術的な長所を取り入れる」ことを方針とする「首都計画」を策定した。それから、10年以上に渡った首都建設の繁盛期を迎え、南京市は現在の都市構造を築き上げた¹⁾。

この時期、多くの高官や富豪が南京で「公館」と呼ばれる庭付きの高級邸宅を設けた²⁾。「首都計画」によると、頤和路周辺では、上流階級の公館が集中して分布する住宅区である「第一住宅区」³⁾(現在「頤和路公館区」)が建造された。当時の欧米都市計画思想を手本として建設された公館区は、街構造と公館において欧米文化の影響を受けている。特に、公館の外部空間の構成から、様々な変化と新たな特徴が生じた。

しかし、南京市民国建築に関する学術的な研究の開始は遅く、出版された専門書も少ない。既往研究には、南京市民国建築の全体概況^{4) 5)}、民国建築の保護利用⁶⁾、頤和路公館区の概況及び保護利用^{2) 7)}における研究がある。しかし、これらはただ歴史文献と公館の現状に基づき、公館の基本情報又は将来への保護再生策を述べたもので、建築空間特徴と外部空間の特徴の研究とはいえない。また、民国園林の特徴⁸⁾と公的庭園の外部空間の特徴⁹⁾に関する既往研究も存在するが、公館外部空間のような私的庭園の外部空間の構成特徴については、まだ研究されていない。

本研究は既往研究に基づき、民国時代における南京市公館を対象に、外部空間の構成を分析することにより、西洋文化の影響を受けた時期に建造された公館にある外部空間の構成特徴を明らか

にする。更に、民国時代の特殊な社会背景から、特徴の形成原因について検討し、当時の建築と庭園文化を明らかにすることを目的とする。本研究の成果は、南京市民国庭園研究、更に公館の保護再生の研究において、有用な知見を得られるものと考えられる。

2. 研究対象と方法

(1) 対象地域と研究対象

南京市民国建築の全体概況^{4) 5)}によれば、南京市頤和路公館区は、民国時代の公館が集中するエリアである(図-1-1、図-1-2)。当時建造された287カ所の公館のうち現在225カ所が保存されている。その中で、省レベル文物保護単位では3カ所¹¹⁾、市レベルでは38カ所である^{12) 13)}。区内公館の保存状態が良好で、民国時代の公館の建築的特徴と風貌が適切であると考えられるため、頤和路公館区を本研究の研究地域とする。

保存状況が良好で、所有者の履歴が明確であり、考証可能であることを条件とし、本研究は頤和路公館区内にある省レベルと市レベルで保護されている公館の19カ所から、資料を収集できた17カ所を研究対象とする(図-1-3)。研究対象の建造年代は1920-1930年代であり、所有者又は住居者は民国時代における社会的な著名人である。対象公館はどれも主たる建物(母屋)、附属建物(車庫、警備員室など)、庭、塀、門で構成されている¹⁴⁾。

(2) 研究方法

「南京民国建築」⁴⁾に記載された南京市民国時代の公館に対し、頤和路公館区で現地調査を行った。また、南京市公文書館や南京市都市建設公文書館、南京市図書館などで、資料を調査収集した。

本研究は公館の平面構成、建築附属空間、動線の3方面より、外部空間の構成特徴を明らかにする。ただし、庭そのものは建造当初の姿から変化しているため、本研究は庭の詳細な景観要素についての分析を行わない。

研究方法としては、まず現地調査の現場記録と文献資料などを整理し、研究対象を確定し、母屋の方位、庭と建築附属空間の位

*千葉大学大学院園芸学研究所 **南京農業大学園芸学院

を包囲する欧米住宅の庭を模倣する上で、中国の伝統的な住宅にある庭の構成特徴も取り入れたと見られる。図-3によると、連続型では母屋が庭に囲まれている欧米住宅の平面構成特徴が顕著に見られる。一方、分離型では母屋が庭に囲まれている割合が少なく、庭が母屋と附属建物と塀に取り囲まれている中国の伝統的な住宅の平面構成の特徴が見られる。具体例として、図-3の17番公館の母屋は庭に囲まれているが、庭に焦点を当てると、庭は母屋と附属建物と塀に囲まれることが分かる。タイプにより西洋と中国伝統住宅の特徴の割合が異なる。

これらのことから、民国時代の公館は、中欧融合の建築様式を用いたのみならず、中欧融合の庭の平面構成も用いたと判断できる。それに対し、連続型庭は欧米住宅により近く、また庭が建築を囲む面が多いほど、その傾向が明らかである。分離型庭は中国の伝統的な住宅の平面構成に一層近い。

(2) 建築附属空間の配置

民国時代に建造された大部分の公館が欧米住宅様式に模倣した建築様式を用いたことによって、母屋に附属している建築附属空間も変化した。生活娯楽空間、又は入口として使用されることで、中国の伝統的な住宅における建築附属空間が有する機能も変化した、配置と種類、構造や材料も変えられている。

1) 建築附属空間の配置

「首都計画」により、「第一住宅区」内にある建物の高さは3階以下に制限された³⁾。それゆえ、建築附属空間の分析対象とされた17カ所公館の母屋、12棟は2階建て、5棟(2, 4, 12, 13, 16)は3階建ての建物である(図-2)。そのうち、3階に建築附属空間を備える母屋は2棟(12, 13)しかない。また、7棟の母屋は数量単一の建築附属空間を持ち(1, 4, 7, 8, 13, 15, 16)、7棟の母屋は2つの建築附属空間を有し(2, 3, 6, 9, 10, 11, 14)、3つを有する母屋は3棟が見られる(5, 12, 17)。

上記に着目し、建築附属空間の数と階数を検討した結果、建築附属空間の配置類型は4種類に分けられる(図-4)。複数単層(DO)の建築附属空間で構成される母屋が6棟で一番多い。次は単一単層(SO)の母屋が5棟、単層と複層を備える複数混合(DM)の母屋が4棟、単一複層(ST)の母屋が2棟である。

これらのことから、建築様式が変わったことにより、建築附属空間も相応して変化した。中では単層の建築附属空間が配置される傾向が多いことが分かる。単層と複層の建築附属空間を組み合わせる形はその次に多く配置され、1つの複層の建築附属空間が一番少ない配置類型と見られる。

2) 建築附属空間の種類

建築附属空間の機能、配置類型の変化に応じて、種類も変化している。本研究に関わる建築附属空間はバルコニー、ベランダ、玄関ポーチ、テラス¹⁸⁾の四種類である。玄関ポーチを持つ母屋が13棟、バルコニー10棟、ベランダ5棟、テラス1棟である。

図-4により、SOにある建築附属空間は玄関ポーチ(4, 7, 16)とバルコニー(1, 13)である。バルコニーが建築の曲がり角に位置し、玄関ポーチが建築の正面に位置するのが特徴である。DO類に属する6棟の5棟(3, 6, 10, 12, 17)は玄関ポーチとバルコニー又はベランダの組み合わせ、ほかの1棟(9)は2つ

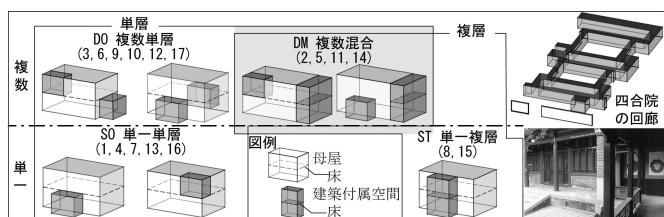


図-4 建築附属空間の配置

の玄関ポーチを持つ。バルコニーとベランダは建築正面の非対称位置にある。玄関ポーチを持つ5棟の母屋の中に、1棟(10)で玄関ポーチが建築正面に位置し、4棟で玄関ポーチが建築の非正面にある。2棟(9, 17)が建築の裏側に持ち、2棟(3, 6)が横側に持つ。ST類に属する母屋の建築附属空間は、玄関ポーチとバルコニーの組み合わせで、母屋の正面对称位置にある。DM類には、玄関ポーチなしの1棟(2, 14)以外、ほかの2棟が玄関ポーチを有する。そして、3棟(2, 5, 11)では複層ベランダが配置され、1棟(14)は複層空間を占めたテラスを備えている。

これらのことから、民国時代の公館における建築附属空間は、母屋入口と2階以上に配置されていることが分かる。また、建築附属空間は単一又は多種類の組み合わせを行うことを重視すると考えられる。更に、建築附属空間の様式がアメリカ式住宅に類似するケースも見られる。例としては、母屋入口に玄関ポーチとバルコニーを結合した単一複層の8番と15番公館(図-2)は、1845-1860年代にアメリカで現れたイタリアルネサンスのリバイバル様式¹⁹⁾に影響されたことが分かる。その様式における建築附属空間の特徴は、玄関ポーチにイオニア式の柱が用いられ、その上部は2階のバルコニーとなっている。8と15番公館には柱頭飾りが使われていないが、玄関ポーチと2階にあるバルコニーの組み合わせはイタリアルネサンスのリバイバル様式を模倣したと考えられる。その原因の1つは、民国時代に呂彦直、趙深、楊廷宝、童寓などアメリカ留学経験を持つ建築家たち²⁰⁾が南京と上海に集まり、民国時代における代表的な建築を多く設計したことが原因の1つと考えられる。

(3) 動線の配置

公館外部空間における動線は、起点の門と終点の母屋入口を接続する。公館平面図により、公館の門と母屋入口の位置と開口方向を確定し、動線の模式図を作成する(図-5-1)。

17カ所の中で、動線が1つのものは13カ所、動線が2つのものは4カ所見られる。門と母屋入口の開口方向が直交する、又は平行することにより、直交型と平行型に分けられる。更に、人の動きの曲がり角の数により、角なし(角がない)、角二(角が2つ)に分けられる。以上の特徴を踏まえ、動線を直交&角一型(V1)、平行&角なし型(P0)、平行&角二型(P2)の3つに分類する。

17カ所のうち14カ所は平行型を有し、4カ所は直交型を有する。一方、角一は4カ所、角なしは5カ所の公館を占め、角二は9カ所の公館で見られる(14番公館は角なしと角二の2つ持っているため、2回計算され、合計18カ所)。平行&角二型(P2)は9カ所の公館で見られ、一番多い。次いで、平行&角なし型(P0)は5カ所、直交&角なし型(V0)は4カ所の公館で見られる。

これらのことから、公館の動線には、2つ曲がり角が付いている動線が多く見られる。これらの門から母屋入口までの動線が、2つ曲がり角が付いている特徴は四合院の入口の動線と類似する(図-5-2)。だが、一周回る動線、曲がり角が2つ以上を備える動線は見られない。欧米住宅に影響を受け、公館の平面構成と建築附属空間の配置の特徴が変化した為、動線も四合院の軸対称

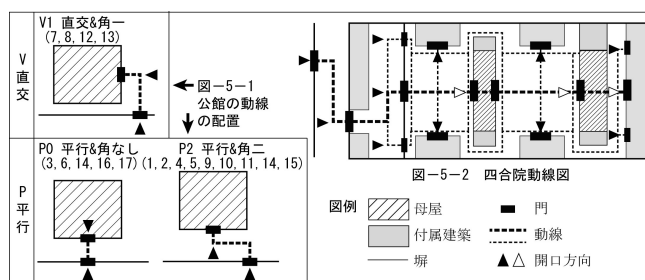


図-5 公館の動線の配置

な動線ではなく、公館の更に簡潔な動線に変化したと考えられる。

(4) 公館外部空間の構成特徴

公館の外部空間の構成特徴を科学的にまとめるため、比較的に近い特徴を持つ公館を類型化する必要があると考える。公館の平面構成、建築附属空間、動線の3部分の分類を基礎データとし、数量化Ⅲ類を通じて数量化されたデータが得られ、階層クラスタ分析を行う。クラスタの数は一定している類似係数の広い範囲内のある点で、数少ない基準でデンドログラムを切り分けることにより、4つの類型が得られる²¹⁾ (図-6)。

3カ所の公館は最も特徴が表われる二面複数平行角二型に分けられる。連続&二面隣接型の平面構成を持ち、複数混合の建築附属空間を備え、平行&角二型動線を持つことが見られる。二面複数平行角二型には、庭が母屋の2面を包囲し、1つの単層の建築附属空間と複層のベランダを持ち、母屋入口と門が平行し、動線が2回曲がって複層の建築附属空間に至ることが特徴と見られる。

6カ所の公館は混合平行角二型に分けられる。4つの中で一番大きいクラスタである。全ての平面構成と建築附属空間の類型を含める為、最も特徴が現れにくいクラスタでもある。14番公館は平行&角二と平行&角なしの動線を持つ以外、他の5カ所は平行&角二を持つことが分かった。動線は2回曲がって単層(4カ所)又は複層(2カ所)の建築附属空間に至ることが見られる。

4カ所の公館は多面単一直交角一型である。連続&三面以上隣接型(3カ所)又は連続&二面隣接型(1カ所)の平面構成の特徴を持つ。単一単層(2カ所)、単一複層(1カ所)、又は複数単層(1カ所)の建築附属空間の配置特徴を備える。直交&角一型の動線特徴を持つことが分かる。多面単一直交角一型には、庭が母屋の2面以上を包囲し、1つ又は複数の単層の建築附属空間を持ち、母屋入口と門が直交する形式が顕著な特徴として見られる。

4カ所の公館が多面複数平行角なし型に属する。連続&三面以上隣接型(2カ所)又は分離型(2カ所)の平面構成の特徴を持ち、複数単層(3カ所)又は単一単層(1カ所)の建築附属空間を備え、平行&角なし型の動線を持つ。多面複数平行角なし型には、庭が母屋の2面以上と隣接し、単層の建築附属空間を持ち、母屋入口と門が平行し、動線が曲がることなく1階にある建築附属空間に至ることが特徴と見られる。

二面複数平行角二型にある複層のベランダは四合院の回廊のように、庭に面し、母屋入口の役割も持つ。混合平行角二型は二面複数平行角二型と同じく動線が2つ曲がってから母屋に至る。プライバシーを守るために、四合院の入口にある動線の特徴を取り入れたと考えられる。多面単一直交角一型の建築附属空間は建築の正面に位置し、庭に面して入口を強調する。また、門から庭が見えるが、四合院の入口のように住居者のプライバシーを守るた

め母屋入口は直接に見えないようになっている。多面複数平行角なし型は直線の動線を有するが、母屋入口が他の建築附属空間と分けられ、装飾の効果も持つが、入口としての作用しか扱われていない。また、分離型庭を有する公館は四合院のように、母屋で前後の庭を分け、庭-母屋庭のように見られる。

これらのことから、公館外部空間の構成特徴は欧米の住宅様式を模倣し、建設原則に基づきながら、中国の伝統的な住宅の特徴も取り入れていることが分かる。特に、庭と母屋の配置関係、又は動線の配置と母屋入口にある建築附属空間の配置との関連性においては、外観上は中国の伝統的な住宅の様式と全く異なる公館でありながら、中国の伝統的な住宅の特徴が残されたと思われる。

4. まとめ

上記までの考察により、以下3つの結論が導き出される。

1) 欧米住宅の「庭が建築を包囲する」形式を模倣するが、中国伝統庭園の「庭が建築に囲まれる」特徴も取り入れられる。連続型庭は欧米住宅により近く、分離型庭は中国の伝統的な住宅の平面構成に一層近いことが分かる。

2) 中国の伝統的な住宅に見られる1つの建築附属空間が四周の建物を繋ぐ形式から、1つの建物に複数の建築附属空間が備わる形に変化したことにより、単層の建築附属空間が配置される傾向が多いことが分かる。単層と複層の建築附属空間を組合わせる形と、1つの複層の建築附属空間を配置する形と見られる。

3) 欧米住宅の単純な動線が用いられながらも、住居者のプライバシーを守るため、1つ曲がり又は横に接続する動線が採用されている。四合院の入口にある動線の特徴が取り入れたものと考えられる。またこの動線の特徴は建築附属空間の変化に合わせて変化したものと思われる。

補注及び引用文献

- 趙興徳、付啓元、李惠芬、譚志雲 (2008)：南京故都文化及其資源開発：南京大学出版社、266pp
- 許峰 (2012)：基于文物法規的南京頤和路民國公館区保護研究：南京芸術学院、42pp
- (民国) 国都設計技術専門弁事処 (1929)：首都計画：南京出版社、270pp
- 盧海鳴、楊新華 (2001)：南京民國建築：南京大學出版社、520pp
- 鼓樓民國建築編委會 (2006)：鼓樓民國建築：中國文史出版社、257pp
- 馮春龍、盧海鳴 (2003)：南京民國建築的價值及其保護利用：南京社會科學 2003(12)、24-30
- 于立凡、鄭曉華 (2004)：保存城市的歷史記憶—以南京頤和路公館區歷史風貌保護規劃為例：城市規劃 28(2)、81
- 劉庭風 (2005)：民國園林特徵：建築師 2005(01)、42-47
- 張雷海 (2013)：南京民國時代における公共建築の外部空間の構成及び特徴に関する研究：千葉大学園芸学研究所、148pp
- 南京市規劃局、南京市城市規劃編制研究中心：頤和路歷史文化街區保護規劃(公眾意見征詢)：南京市規劃局ホームページ<http://www.njghj.gov.cn>、2013.1.17更新、2013.3.18参照
- 江蘇省人民政府：省政府關於公布第七批省級文物保護單位的通知：江蘇省人民政府ホームページ<http://www.js.gov.cn>、2011.12.19更新、2013.6.4参照
- 南京市人民政府：市政府關於公布第四批南京市文物保護單位的通知：中國&南京ホームページ<http://www.nanjing.gov.cn>、2012.3.20更新、2013.6.4参照
- 省レベル、市レベル文物保護單位とは、中國人民共和國國務院が制定した文化遺產保護制度のうち、省級と市級の文化遺產に對して制定される名稱。
- 本研究での公館とは邸宅全体のこと、主たる建物に特定ではない。
- 吉村元男 (1967)：外部空間評議理論 その1：造園雑誌 30(4)、15-20
- 天井：中國の住宅建築では、小さな中庭を中心に四部屋を配し、あるいは一方が壁となった中庭の三方に部屋を配して、周囲につなげた屋根を作る場合がよくあり、その時に庭の上に見える屋根のない四角い空間を「天井」とよぶ。
- 陳從周、潘洪濤、路秉傑 (1993)：中國民居：南天書局有限公司、320pp
- 玄關ポーチ：屋根をついた開放された屋外空間である。玄關ポーチと言えるポーチは古代ギリシアでまず現れ、16世紀イタリアの宗教建築で使われたことは先駆と見られる。アメリカ住宅における玄關ポーチは室内を汚れないため人と人を集める機能が見られる。バルコニー：建築物の床面と同じ面でも外部に突き出した手摺で囲われた部分という。Balconyの起源はイタリア語、ローマでは宗教儀式の用途も用いる。ベランダ：家屋の母屋から外へ張り出した部分で、緑や柵で囲まれることがあり庇や軒下に取り込まれるもの、屋根がかかっているものをいう。最初オーストラリアの建築で現れ、1850年代に初めて植民地の建物の中で広まることになって、1900年代にベランダはスペイン・ジュネーションスタイルと合同してアメリカ合衆国西部において人気が出るようになった。テラス：家屋の母屋から突き出した部分のこと。農業におけるテラスの起源は先史時代に遡ることができる。建築における紀元前(13000-9800BCE)で作られたテラスが中東で発見され、また古代ギリシアでも使われたと見られる。世界中の幅広い時代と範囲で使われると見られる。
- ジョン・ミルズ、ペーカー (1997)：アメリカン・ハウス・スタイル：株式会社HICPCM研究所、253pp
- 呂彥直氏、1918年(米)コーネル大学建築学士学位、趙架氏、1923年(米)ペンシルベニア大学修士学位、楊廷宝氏、1924年(米)ペンシルベニア大学修士学位、童蔭氏、1926年(米)ペンシルベニア大学修士学位
- 章俊華 (1999)：中國皇家庭園頤和園における「扁額」からみた庭園空間の特徴について：ランドスケープ研究：日本造園学会誌、62(5)、761-764

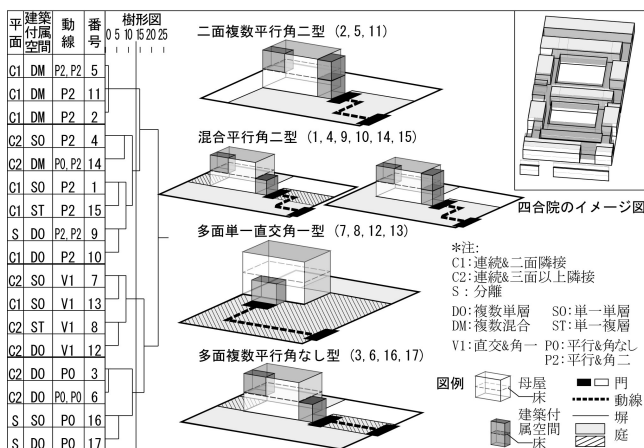


図-6 公館の外部空間の構成特徴